

# 島根の記憶

⑩

て二四年(大正十三)完成し、一家は日本を去る三九年まで住んだ。

すく近所だった東史さん(73)(宮崎県都城市)が一番の仲良しだった。「日本人形を抱えて遊びに行くんです。

メヒテルトさんの家には、青い目の珍しい人形がたくさんあつて、並べてお人形さんごっこ。彼女は日本語ができたから、十分会話ができました」と思い出を語ってくれた。

小学校に入るまでのつき合いで、東さんも二十歳代で松江を離れた。今もクリスマスカードのやり取りが続けているが、印象的なのは、幼心にも感じたその「ドイツ人気質」という。

「ままごとで泥をこねて団子を作るのは、もっぱら私。彼女もしたくてウズウズしてゐるんですが『洋服が汚れる』とさせてもらえなかった。お父さんはニコニコした方でしたが、お母さんが良いこと悪いことはしっかり区別して、厳しくしつけてたんです。追いかけたメダカやホタルはめっきり減った。今も島根の歴史ある閑静な雰囲気をとどめている。」

宅地化が進み、かつて三人

大单身教職員用宿舎として残

どめている。

## 松江・三角屋根の外国人官舎

昭和初期、旧制松江高(現島根大)でドイツ語を教えたフリッツ・カルシュの長女メヒテルトさん(76)(米在住)が、松江市奥谷町に吉田繁野さん(74)を訪ねたのは一九九〇年のことだ。「懐かしい松江の人たちに会いたい」と二十二年ぶりに来日し、同町に残る生家や幼なじみの家を巡った。

吉田さんは留守をしていたが、外国人講師のための官舎として、三角屋根を持つ洋館風の家で、メヒテルトさんは二八年(昭和三)に生まれた。



着物の女の子たち(後列右がメヒテルトさん、前列右が東史さん。一九三七年頃の撮影) 若松秀俊・東京医科歯科大学教授提供



松江市奥谷町に今も残るメヒテルトさんの生家

# 小さな交流にもお国柄